

果物の摂取量が多いと胃がんリスクが低下する可能性ーアジアの研究より

果物や野菜の摂取と胃がんリスクとの関連について、疫学的な知見は一貫していない。本研究では、日本・中国・韓国において、果物や野菜の摂取量と胃がんとの関連について前向き試験のプール解析を実施し検討した。

試験開始時に血液検体、人口統計関連・ライフスタイル・食事に関するデータを収集した「ヘリコバクターピロリ・バイオマーカー・コホートコンソーシアム」から非噴門部胃がん症例 810 例およびマッチさせた対照群 1,160 例について解析した。総エネルギー摂取量、喫煙、ヘリコバクターピロリの感染状態を調整した条件付きロジスティック回帰により、果物や野菜の摂取量の四分位における胃がんリスクのオッズ比をコホートおよび性別ごとに算出した。その結果、果物の摂取量の増加は、非噴門部胃がんのリスク低下と関連がみられた（オッズ比 0.71、傾向の $p=0.02$ ）。ヘリコバクターピロリに感染した果物低摂取者に対する、ヘリコバクターピロリ抗体が証明されていない果物高摂取者の胃がん発症率が最も低かった（オッズ比 0.12）。また、果物高摂取と胃がん発症の逆相関はヘリコバクターピロリの感染例では弱かった（オッズ比 0.82）。野菜の摂取量と非噴門部胃がんリスクとの間には、非用量ー反応を示す弱い逆相関がみられた。今回の結果から、アジア人においては、果物を多く摂取することが非噴門部胃がんのリスクを低減するのに役立つ可能性が示唆された。

出典：International Journal of Cancer. Published online Oct 19 2016;

doi: 10.1002/jic.30477